

研究成果

島 文次郎 本館初代館長略伝

廣 庭 基 介

1. 島館長の図書館界への功績

本館歴代館長の内、初期の館長では、『広辞苑』の作者である新村出第三代館長の名が放つ大きな光芒のために、初代の島館長の名はヴェールがかけられたように薄れ、本学の教官方でもその名を御存知ない方が多いようである。

私は1959年に『京都大学附属図書館六十年史』の編纂に携わったことを契機として、本学図書館をわが国有数のレベルに育てて来た明治期の先輩職員の事蹟などを追跡するようになった。その結果、わが国図書館界にとって、忘れられてはならない重要な事蹟が島初代館長によって幾つか果たされたことが明らかになった。ここでは、先ずそれを紹介することから始めたい。

島館長の功績の第一に挙げるべきは、本学図書館創設の1899（明治32）年12月11日から僅か1カ月後の1900年2月4日に、図書館事業の啓蒙と研究を目的として、関西文庫協会を設立し、その機関誌として、日本初の図書館雑誌となった『東壁』を創刊したことである。（東壁は中国の正史『晋書』の「天文志」に、文籍を司る二つの星の名前で、この二星が明るければ、書籍が集まり、道術行われ、小人退いて、君子がきたる、という所からとったといわれ、名付け親は、後に文学部教授、人文科学研究所初代所長となった狩野直喜博士といわれている。功績の第二には、前述した関西文庫協会発会式において可決された同協会会則において機関誌に触れて「第4条 雑誌ニハ図書館学“ビブリオテクス、ヴィセンシャフト”ニ関スル論説記事及本会報告ヲ掲載シ之レヲ世ニ公ニス」とあり、これ又わが国で初めて「図書館学」という語彙を明示したことである。

第三に、木下広次本学初代総長も同じ意見をもっていたのであるが、島館長は京大附属図書館を一般公衆に公開する方針を一貫してもっており、実際に公衆用閲覧室の建築予算を在任中（明治33年より同43年まで）毎年要求し続けた

ことを挙げたい。これは実現しなかったけれども、明治期の帝国大学にあっては、驚くべき先見性、開明性であった。

以上に挙げた3点の事蹟は、京大だけを対象にした問題ではなく、わが国の図書館史上に明記されるべきものである。

一方、本学の図書館にとっての功績は、次節以後にも触れるが、一言で言うなら、司書職員を率いて、創設期につきものの困難な諸問題を次々にクリアし、その上に本館の内容を、単に一大学図書館というに止まらず、あらゆる館種を含めても、本邦有数の地位に育て上げ、司書養成の面でも、戦前の文部省主催図書館職員講習会に毎度講師を勤める優秀な司書を輩出させ、その名声のゆえに、初期蔵書の核となる多くの寄贈書籍を招来して、一層内容を充実させる基盤を作ったことである。

2. 島館長の生い立ち

島館長は元姓を野口といった。1871（明治4）年10月6日、父・野口常共と、母・恵以子の間に誕生した。生誕地が父祖の地・長崎県諫早が、明治政府の太政官に出仕した父の任地・東京か、は不明である。父は松陽と号し、佐賀鍋島藩支藩諫早領の学校好古館に学び、かつ同館の教諭福田渭水宅に住み込んで教えを受け、さらに22歳までに2度にわたり、播州林田建部藩の勤皇派の儒者・河野鉄兜（コーノ・テット）の塾に留学し、1864（元治1）年諫早に帰って、母校好古館の教諭に任じた。島館長の姓が野口から島に変わったのは、この河野鉄兜塾に、豊後府内大給藩出身の勤皇志士で、維新後、初代岩手県知事となる島維精が暫時遊学した際に、どちらが申し込んだものか不明ながら、島姓への移動が行われたと考えられる。1871（明治4）年、松陽は官途に就くべく上京。太政大臣三条実美に漢詩と能書の才を認められ、太政官8等出仕に就職した。島文次郎が生まれたのは、丁度その頃であった。松陽は1877（明治10）年、内閣少書

記官に昇進。上司・同僚に川田剛（歌人川田順の父）久米邦武（後に東大教授を不敬罪で逐われ、早大教授となる）巖谷修（童話作家巖谷小波の父）などがあつた。しかし、1879（明治12）年宿病を発し、退官して養生に専念するも、1881（明治14）年、39歳にて永眠。時に島（以後敬称、職名などを略し、島とする）は9歳であつた。

島は1896（明治29）年、東京（帝国）大学文科大学英吉利文学専修を卒業、同時に大学院に進学した。文科大学の同期卒業生には姉崎正治（嘲風）・高山林次郎（樗牛）・喜田貞吉・黒板勝美・大町芳衛（桂月）・笹川種郎（臨風）・幸田成友（露伴の弟）・内田銀蔵・原勝郎・佐々政一（醒雪）・桑原隲蔵（桑原武夫の父君）・岡田正美など多士済々で、島も含めて、世に『29年組』と囃されたくらいで、このメンバーが帝国文学会を組織し、雑誌『帝国文学』を創刊したのであるが、その初代編集室は森川町にあった島の自宅におかれていた。

島が東大大学院で『エリザベス朝時代の戯曲』の研究を続けていた27歳の1899（明治32）年2月24日、京都帝国大学から、将来館長に補する含みをもって『図書館の事項研究』という曖昧な名称の依頼を受けた。これが京大図書館との縁の始まりであつた。この依頼と承諾の文書は、図書館の庶務関係往復文書綴りに綴じ込まれている。しかし、30歳にもならない大学院生に対して、何故、誰がこのような依頼を発することを決めたのか、を語る史料は見当たらない。ただ、内藤湖南の弟子で、元台北帝大教授、京都国立博物館長を勤めた神田喜一郎は自著『敦煌学五十年』において、大意次のように推測している。「首都から一地方都市に落ちた京都在住の学者達は、京都帝大の創設前夜、一体どんな博学の（或いは浅学の）知識教養を備えた学者が東京からやってくるのか、と冷淡な態度で迎えようとしていた。木下広次総長は京大図書館の初期蔵書を急速に充実させる一法として、学内外の有志から圖書の寄贈を受けたい意向を開設以前から表明していたが、図書館長の人物如何によっては、それも進捗しない恐れがあつた。そこへ島館長の任命が行われたので、島館長なら、野口松陽の次男であるし、松陽が青年時代に

に河野鉄兜（コーノ・テット）の塾に遊学し、詩と書をよくした秀才であつた上に、長男の寧斎も漢詩人としてよく知られていたことが良い作用をした。京都には鉄兜に敬愛の情をもつ学者・蔵書家が多かつたのである。中でも富岡鉄斎と謙蔵父子、山本行範、猪熊浅麿、山田永年など、京都在住の第一級の文化人達が、若い島図書館長に対して親しみの感情を持ってくれたことが、附属図書館のみならず、京大そのものへの京都文化人の態度・感情を和らげるのに役立ったことは測り知れなかつた」と推測している。島に「任法科大学助教授、高等官7等、補付属図書館長」の辞令が出たのは1899年（明治32）年11月6日付けであつた。時に満28歳を迎えたばかりであつた。法科大学に籍をおかれたのは、1900（明治33）年まで文科大学が無かつたため、図書館長の職に最も相応しい分科大学が法科であつたからであろう。その1カ月後の12月11日に図書館が開館し、さらに2カ月後の1900（明治33）年2月4日、本稿第1節で述べたように関西文庫協会の発会式を、図書館閲覧室を会場として、44人の参加者と共に挙行したのであつた。

島は開館以後、主として名古屋以西、時には東京・栃木も含めて、各地の蔵書家や寺社を廻って、貴重な蔵書や古文書の臨写や寄贈の依頼を精力的に行つた。館務の執行に当たっては、全館員会議を開き、業務の改変・臨時職員の採用・物品の購入などに至るまで、最も軽い職位の者にも発言を許し、自ら事務用目録主任、寄贈図書監督などを担当して、先頭に立って働いた。1901（明治34）年には大閲覧室に電灯設備が設置され、午前8時から午後9時までの開館時間となった。それまでは、暗くなると利用できなかった代償として5月から9月までは午前7時から開け、大祭祝日日曜日でも開館していた。また、1908（明治41）年12月、図書館に関する総長からの諮詢に応じ、図書館長、各委員の提議事項を審議するために、各分科大学長、教授各1名よりなる附属図書館商議会を設置するなど、草創期の図書館を熱心に唱導したのであつた。

3．島館長にふりかかった非運

しかし、逆風が東から吹いてきた。すでに1901（明治34）年頃より、東京に住む実妹野口

曾恵に、竹林男三郎という、東京外語学校ロシア語科を中途退学した男が求愛していたが、兄・寧斎の忌避に遭っていた。そのような状況下の1904（明治37）年、曾恵が女兒を出産すると、野口家に風波が絶えず起こるようになる。寧斎は、森槐南門下で、明治期の漢詩人の五指に入る著名な漢詩人であった。寧斎門には副島種臣、伊藤博文、乃木希典などの元勲や将軍があったことから著名度がわかる。一方、寧斎は宿病に悩んでいた。島の祖父・野口良陽が、旧藩時代、医者として診療中にハンセン病に罹ったといわれ、不幸にも寧斎にそれが顕著に発病したらしい。1905（明治38）年5月、寧斎は自宅にて38歳で急死した。前記の竹林男三郎は、この病気が遺伝病であると信じ、それが曾恵に発症するのを防ぐために、当時の迷信に従って、通りすがりの子供を殺害して腎肉を切り取ったという容疑、同時に自分を嫌忌している寧斎をも殺害した容疑、さらに、その頃起こった麹町の薬店主殺しの容疑と都合三つの殺人容疑をかけられて逮捕され、花井卓蔵らの弁護により前2件は無罪となったが、薬店主殺害が有罪となって、1908（明治41）年処刑されてしまった。現在でも、男三郎は冤罪であったとする説もあり、明治期最大の疑獄事件と評されている。日露戦争勝利の報道が静まると、俄然、この事件が新聞紙上を賑わし、添田唾蟬坊の演歌にも『嗚呼、世は夢か幻か』と謳われて一世を風靡したのであった。当時の時代性として、如何に島が無関係と判っていても、いやしくも帝国大学の図書館長ともあろう者の係累が、嫌疑だけとはいえ、刑事事件の加害者と被害者に擬せられた上、実兄がハンセン病患者であった事実まで伝えられたことが、島にとってマイナスに働かない筈が無かったと思われるのである。

これに追い撃ちをかけるように、島を陰に陽に支持してきた初代総長木下広次の持病の結核が悪化し、1907年依願退官、1910（明治43）年8月、59歳で逝去したことは、島をして、全学の図書館行政の長として勤務する意欲を失わせるに足るものであったと推測される。

島は、木下総長の病状が危険となった同年7月25日付けをもって、図書館長の職を依願退職

し、以後は第三高等学校教授を本官、文科大学教授を兼官とする英語・英文学の研究・教育の世界に帰って行ったのである。しかも、島は1923（大正12）年3月には、還暦までに9年も残したまま、すべての官職を辞任してしまったのであった。もっとも、1927（昭和2）年から京都女子高等専門学校の親授待遇の英文学講師に就任し、1943（昭和18）年まで16年間勤務した。その就任早々の1928（昭和3）年、20歳年下の京都女子高等女学校教諭であった高井トラエと遅い結婚を迎えたことは、数少ない朗報であった。島は太平洋戦争敗戦から2カ月後の1945年10月10日、腎臓病により74歳をもって永眠した。墓は洛東鹿ガ谷法然院にある。

（付記）図書館とは直接関係しないが、島の逝去後、木方庸助（神戸外大、京外大） 中西信太郎（京大） 黒田正利（岡大） 堀正人（関大） 深瀬基寛（京大） 岡本隆男（京女大）など、英文学での教え子が、島の思い出を雑誌などに発表し、いずれも、島が不幸にめげることなく、毅然として、堂々と生涯を生き抜いた“人生の達人”と評し、特に島夫妻と京都女子学園で同僚として勤務した岡本隆男は、夫妻の優しい生活態度を敬慕し、筆を極めて称賛している。

参考文献：田中真治編『鉄兜及其交友の尺牘』西播磨新聞社 昭和4刊、

神陵史編集委員会編『神陵史---第三高等学校八十年史---』三高同窓会 昭和55刊、

長崎県教育会編・発行『大礼記念長崎県人物伝』大正8刊、

京都大学附属図書館編・発行『京都大学附属図書館六十年史』昭和36刊、

関西文庫協会編『東壁』（復刻版）学術文献普及会 昭和49刊、

木方庸助筆『島文次郎先生を懐ふ』（『英語青年』May 1, 1946）、

岡本隆男筆『牧愛舎雑筆（2）---心の絆は切れない---』（こころの会の雑誌『心』第7号、1985.6刊、堀正人の文は『京大英文学会報』第2号、中西信太郎の文は京大英文学会機関紙『ALBION』NS.No.2（March 1953）

黒田正利の文は同じ『ALBION』NS.No.5（Nov., 1956）

深瀬基寛の文は京大教養部英語教室編『英文学評論』第4輯（昭和32.3）

（ひろにわ もとすけ：元法学部図書室整理掛長 現花園大学助教授）